

# 「話すこと」の言語活動の指導はどうあったらよいか

長 江 宏

はじめに

このところ、communication ということが、英語教育の世界ではもちろんのこと、世間一般で大変話題になっている。それは、日本の地位がこれだけ国際社会の中で高くなってくると、意志伝達能力を高めることが、時代の要求になってくるからである。

英語教育では、臨教審や教課審の答申を受けて、コミュニケーション能力を育成することが、大きな目標となっているわけで、後述する新学習指導要領では、中学校や高等学校で、このことに重点を置いていることが分かる。

国際社会では、communication gap を埋めるということは、直接国の利害に結びつくだけに、重要なことである。外国語(英語)科で問題にしているのは、単に英語で communication を図ろうということだけではなくて、国際理解の基礎を培うということにも重点を置いている訳である。

そこで、ここでは意志伝達能力、つまり「話すこと」の言語活動を取り上げて、具体的な言語活動のあり方を探ってみたい。

## 1. なぜ「話すこと」の言語活動が重視されるのか

国際化が進む中であって、時代に生きる日本人を育成するために、これからの学校教育において、諸外国の人々の生活や文化を理解し尊重するとともに、我が国の文化と伝統を大切にする態度を育成することを重視していくことが、教育課程の基準の改善のねらいのひとつになっている。

そのために、我が国の文化と伝統に対する関心や理解を深めさせ、日本人としての自覚を持たせることが大切なことである。さらに、諸外国の文化に対する理解を深めさせ、世界とのかかわりについて関心を持たせ、国際社会に生きる日本人としての自覚と責任をもたせることが肝要である。

外国語(英語)科では、国際化の進展に対応して、国際社会の中で生きていくために必要な資質を養うという観点から、コミュニケーション能力の育成や国際理解の基礎を培うことを重視する必要がある。このために、聞くこと及び話すことの言語活動の指導を一層充実することが求められている。

更に、指導に当たっては、生徒の学習段階に応じて指導が適切なものになるように、指導

内容を重点化・明確化することが必要である。また、多様な指導をすることによって、外国語の習得に対する生徒の積極的な態度を養い、実践的な外国語の運用能力を身につけさせ、外国語についての関心と理解を高めることが必要なことである。

以上のことから、外国語（英語）科では、読むこと及び書くことの言語活動の指導がおろそかにならないようにじゅうぶん配慮しながら、聞くこと及び話すことの言語活動の指導を充実することが各中学校・高等学校に期待されているわけである。

## 2. 改善する具体的事項は何か

具体的な改善事項については、中学校と高等学校に別けて、箇条書きにしてみる。

（中学校）

(ア) 「言語活動」については、現行の3領域のうち、「聞くこと、話すこと」をそれぞれ独立させて、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4領域で構成する。

(イ) 「聞くこと」及び「話すこと」の指導を一層充実する。

(ウ) 「言語材料」については、生徒の実態に応じて、多様なしかも豊かな活動を行うことができるようにその取り扱いの一層の弾力化を図る。その際、語、文、文型、文法事項などの学年枠をはずし、多様な表現活動ができるように配慮する。

(エ) 聞くこと及び話すことの指導にあたっては、特に音声による指導を重視し、ネイティブスピーカーの協力を求めたり教育機器の利用などが一層進められるように配慮する。

(オ) 各学年における授業時数の弾力的な運用については、教科の内容を一層定着させるために、基礎的・基本的事項の補充深化を図ったり、日常生活に関する会話やヒアリングの充実など言語活動を深め、豊かなしかも多様な教育活動が展開できるようにする。

（高等学校）

(ア) 生徒の能力・適正に応じた指導を充実し、聞くこと及び話すことの言語活動の指導を一層充実する観点から、「英語Ⅰ」、「英語Ⅱ」、「オーラル・コミュニケーションA」、「オーラル・コミュニケーションB」及び「オーラル・コミュニケーションC」、「リーディング」及び「ライティング」の各科目で構成する。

(イ) 「英語Ⅰ」及び「英語Ⅱ」は、聞くこと、話すこと、読むこと及び書くことの言語活動の指導を総合的に行うようにする。

(ウ) オーラル・コミュニケーションABCは、聞くこと及び話すことの言語活動の指導を重点的に行うように内容を構成し、日常生活に関する会話、スピーチ、放送などを聞いて理解することなどを含めて指導する。

(エ) 「リーディング」、「ライティング」については、言語活動が一層深められるような内容を構成する。

(オ) 「英語Ⅰ」は、低学年において履修させるようにし、「英語Ⅱ」、「リーディング」及び「ライティング」は、「英語Ⅰ」を履修した後に、それぞれの生徒の能力、適正に応じて、選

択履修できるようにする。

(カ) その他は、中学校の場合と同じである。

### 3. 「話すこと」の指導は、どうあったらよいか。

ここでは中学校を取り上げて述べてみたい。前述したように、現行の学習指導要領では、「聞くこと、話すこと」がひとつの領域とされている。新学習指導要領では、「聞くこと」と「話すこと」の言語活動の領域をそれぞれ独立させている。これは、やはり教育課程改善の答申の主旨をいかしたものであろう。

それでは、現行のものと新学習指導要領とを比べてみよう。

	新学習指導要領 「話すこと」の目標	現行の学習指導要領 「聞くこと、話すこと」の目標
第一学年	初歩的な英語を用いて、身近で簡単なことについて話すことができるようにするとともに、英語で話すことに親しみ、英語で話すことに対する興味を育てる。	初歩的な英語を用いて、簡単な事柄を聞いたり話したりすることができるようにさせる。
第二学年	初歩的な英語の文や文章を用いて、自分の考えなどを話すことができるようにするとともに、英語で話すことになれ、英語で話そうとする意欲を育てる。	初歩的な英語を用いて、事柄の概要をとらえながら聞いたり話したりすることができるようにさせる。
第三学年	初歩的な英語の文章を用いて、自分の考えなどを話すことができるようにするとともに、英語で話すことに習熟し、英語で話そうとする積極的な態度を育てる。	初歩的な英語を用いて、事柄の要点をとらえながら聞いたり話したりすることができるようにさせる。

前述のように、話すことの各学年の目標を対比してみると、次のようにまとめることができる。

現行の学習指導要領では、各学年とも、「初歩的な英語」として扱っている。新学習指導要領では、第1学年では、「初歩的な英語」、第2学年では、「初歩的な英語の文や文章」、第3学年では、「初歩的な英語の文章」となっている。

話す内容であるが、新学習指導要領では、「身じかで簡単なことについて話すことができるようにする」とあり、第2学年、第3学年では、「自分の考えなどを話すことができるようにする」とある。

英語を用いて話すことの内容は、第1学年では、身じかで簡単なことしか話せないが、第2学年や第3学年では、自分の考えなどを話すことができるようになるからであろう。

また何よりも大切なことは、興味を育てることであり、英語になれ、意欲をもたせることと、更に、習熟させ、積極的な態度を育てることである。つまり、英語を話すことについては、英語を話すことについての興味、意欲、態度が重要なことになるのである。

#### 4. 各学年の、内容の取り扱いをどうしたらよいか

第1学年の、話すことの言語活動の指導事項は、次のようになっている。

(ア) 語句や文をはっきりと正しく言うこと。

(イ) あいさつ、質問、指示、依頼などに適切に応答すること。

(ウ) 伝えようとすることを簡単な文で話すこと。

それでは、ア、イ、ウのそれぞれの言語活動として、どのようなことが考えられるであろうか。

(ア) 語句や文をはっきりと正しく言うこと。これは、正しい発音で語句や文をはっきり言わせるようにするということであろう。第1学年の入門期に、音とつずりの関係を学習させることによって、かなり指導できるが更に次のことに留意して指導する必要がある。

1. oral presentation などのときに、教師の発音が、正確であること。また、繰り返し new words を発音してみせ、生徒にも言わせるようにする。

2. chorus で言わせるだけではなくて、個別に生徒に言わせる。

3. flash cards, 実物、絵などの visual aids を効果的に使う。

4. 既習の言語材料を用いて、生徒のほとんどが理解できるような易しい英語を話すようにする。

(イ) あいさつ、質問、指示、依頼などに適切に応答すること。これはまずあいさつから触れてみよう。教室では、いわゆる教室英語が使われる。したがって授業の始まりには、あいさつが行われる。たとえば、

Teacher : Good Morning, boys and girls.

Student : Good Morning, Mr. (Mrs.) ~.

T : How are you?

S : I'm fine, thank you. And you?

T : I'm fine, too. Thank you.

もちろん授業の終わりにも、Good-by (e), class. See you later. See you next week. Have a nice weekend. So long. など内容を多くしていけばいいわけである。

質問、指示、依頼、などに適切に応答するということは、言語活動の実際につながることであるのでできるだけ自然な situation で行われるようにすることが必要である。

例えば、

Do you like apples? Yes, I do.

Can you swim? Yes, I can.

Is he playing the guitar? Yes, he is.  
 What time does your father come home? He comes home at five.  
 Is this your pencil? Yes, it is.  
 What is your name? My name is Hiroshi.  
 What time is it now? It is eight.  
 What season do you like best? I like winter best.  
 What does Jane have in her hand? She has a doll.  
 Do you know that boy? Yes, I do. I know him very well.  
 Are there many parks in Tokyo? Yes, there are.  
 How many students are there in your class? There are thirty.

についてであるが、これは教師の direction もあるが、多くの場合 Classroom English の中でかなりこなわれることになる。したがって実際の生きた場面になる。

Stand up.	Open your books.
Sit down.	Repeat after me.
Listen to me.	Thank you.
Look at me.	All right.
Look at this picture.	O. K.

そのほか日付や曜日などもあるが、毎日の指導の中で、広く指示、依頼ならびに応答を繰り返すことが大切なことである。

(ウ)伝えようとすることを簡単な文で話すこと。これは、第1学年の入門期の指導が oral であり、例えばカードに絵を書かせて、自分の言葉で相手と話しをさせることなどが、比較的多くなるので、必要な visual aids や雰囲気づくりをすることが大切である。

第2学年の話すことの言語活動の指導事項は、次のようになっている。

(ア)相手の言うことを聞き取って適切に質問したり応答したりすること。

(イ)聞いたり読んだりしたことについて応答すること。

これらの指導事項は、第1学年の言語活動の指導にひき続いて行われるものである。

(ア)相手の言うことを聞き取って適切に質問したり応答したりすること。この活動は、第1学年の話すことの言語活動の(イ)あいさつ、質問、指示、依頼などに適切に応答すること。の活動を発展させたものである。

たとえば、Australia is one of the most important countries for Japan. Australia buys a lot of things from Japan, and Japan buys meat, wool, minerals, and so on from Australia.

この文を聞き取って、更に What does Japan buy from Australia? と質問された場合、的確に聞かれた内容に答えなければならない。

またこれは、(ウ)伝えようとすることを簡単な文ではなすこと。の活動とも、かわりか

あり、絵などの visual aids を用いて、積極的に話せるようにすることが大切である。

(イ) 聞いたり読んだりしたことについて問答すること。これは、たとえば次のような文を読んで問答することが考えられる。

Martin Luther King, Jr. was the leader of the Black people in the United States of America. He always said, "All men are equal"

Something happened in December 1955. A black woman got on a bus and took a seat in the front.

"Don't sit there!" shouted the bus driver. In those days Black people could only ride in the back of a bus.

このような文章の内容理解のチェックには、T or F Test, Q and A, 内容にあった文や文章の選択、主題選択、内容にあった文章の書き換えなどさまざまな方法がある。また、short talk などを取り入れて、pair work や group work などの活動することも効果的なことである。

第3学年の話すことの言語活動の指導事項は、次のようになっている。

(ア) 話そうとすることを整理して、大事なことを落とさないように話すこと。これは、話そうとすることを落とさないようにということと、大事なことを落とさないようにということの2つの要素が含まれている。

話そうとする事柄を整理するとは、どんなことであろうか。つまり、自分の言いたいことを要領よく伝える必要があり、前もって自分の話すことを整理して話すことが必要である。大事なことを落とさないように話すことは、何を相手に伝えたいのか、話のポイントをはっきり要領よく話すことである。

第3学年になると言語材料が豊富になり、話す言語活動も多様化することができる。しかし、一方3学年になると、sentence も長くなることから、文章が複雑になってくる。そのため、運用面が不十分になりがちである。したがって、1・2年で培ってきた話すことの言語活動を更に発展させることが必要である。

そのためには、short talk をさせるとか、impromptu な talk などいわゆる self-expression などをさせることが効果的である。

##### 5. 話すことの言語活動の指導計画をどのように立てたらよいか

英語の授業では、とにかく communication practice がおろそかになりがちである。そこで、絶えず functional かつ notional なアプローチが必要である。つまり機能や表現すべき概念を意識に上らせることが大切である。

たとえば、話す目的、文脈、場面、話題などを設定して、臨場感を与えて、実感を持って参加するようにさせることである。それには、教師自身が、entertainer でなければならない。あるときは、生徒に暗示を与え、登場人物になり切らせ、更に感情移入させ、パフォーマンスさせることが大切なことである。こう述べてくると、教師は、豊かな imagination と eloquence が求められるわけである。

話すことの言語活動は、教師の指導よろしきを得れば、生徒に学習意欲を持たせ、更に成  
就感を体験させることによって、話すことに対する興味や関心を高めることができる。

例えば

T : Where was the parcel thrown?

L1 : On to the road (teacher shakes head) - the parcel was thrown on the road.

T : Good. (To L2) What was thrown on to the road?

L2 : (hesitating, assuming that the teacher could not be asking for information that  
had just been given)

T : (helpfully) The parcel was thrown on to the road.

(Developing Communication Skills より)

Pat Pattison 氏は、この文例を上げて、とにかくこのような oral practice が行われるが、こ  
れでは、生徒が as and for communication として the Foreign Language を学習していると  
感じなくなるのではないかと言っている。更にこのようなやり方であると、外国語学習に  
おいて、drop-out する生徒を多くするのではないかと指摘している。

つまり、性格にもよるが、口がうまく回らない生徒にも、気楽にしかも一言でも英語が言  
えるように気配りすることが必要である。したがって、教材内容を十分吟味して生徒と楽し  
い interaction ができるようにすることである。

それでは、どんなことが可能であろうか。やはり Pettison 氏は、次のようにいっている。

Oral exercises are sometimes divided into two broad groups. The first contains drills,  
substitution tables, structure-based dialogues for repetition, etc. These may be  
variously described as rehearsal, controlled, medium-oriented, pseudo-or pre-com-  
municative practice based practice. The second group includes exercises with functional  
language, role-play, practice based on situations or themes, language games, free  
conversations and discussions, etc.

そこで speaking の具体的な言語活動をあげてみよう。

#### (1) Questions and answers

これは correct sentence を production させることを配慮するが、生徒の答が不正確でも  
誤りを問わないことにする必要がある。

#### (2) Role-plays

これは text の dialogue などを利用して、キューを与えて、一定の構文を用いて表現させ  
る。pair work や group work などが効果的である。

#### (3) Game による活動

これは BINGO, Happy family などのゲームや information gap を埋めるインタビュ  
ー、言語材料の定着を図る split dialogues 更に controlled conversation, guided or free  
conversation にまで広げると効果的である。

#### (4) paraphrasing

これは既習の言語材料を用いて、未習の言語材料を表現してみるという活動である。

(6) gesture

これはジェスチャを通して communication をさせることである。

(7) discussions

これは content of communication, reason for communication, result of communication などが課題になるわけで、教師の力量が問われることになる。

## 終わりに

これまで、「話すこと」の言語活動はどうあったらよいかということについて述べてきたが、話すことの communication 能力を高めるには、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」の言語活動がいまって、効果が上がるものである。

つまり、communication は、speaking や hearing などだけで、行われるのではない。したがって、リスニングで、受容的な面と伝達内容の把握という二面から、生徒たちに学ばせることが大切である。しかし授業の中で、リスニング・コンプリヘンションを育成することは、なかなか大変なことも知っておく必要があろう。

「読むこと」では、単に、読み物を作者からの提供されたものとして、passive に受け止めるのではなくて、むしろ、読み手側が、予測を立てて、しかも読み方が正しかったかどうか吟味できるぐらいであることが望ましい。

「書くこと」では、書き手が、自分の考えや意図することを文に表現した場合、これが読み手に十分理解できるかどうかということである。そうなってくると、単に文や文型を写させたり、書き換えさせるのでは、不十分になってくる。controlled ないしは guided composition から free composition の基礎力までつけることが必要であろう。

## 参考文献

1. Developing Communication Skills, Pat Pattison
2. Communicative Language Teaching, William Littlewood
3. Teaching Language as Communication, H.D. Widdowson
4. Strategic Interaction, Robert J. Di Pietro
5. 教育課程審議会答申
6. 中学校学習指導要領 (新・旧)
7. 高等学校学習指導要領 (新・旧)
8. 中学校学習指導要領の解説と展開 教育出版
9. 中学校学習指導要領の展開 明治図書